手紙 -ラブレター-

蒼愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
手紙　―ラブレター―

【Ｎコード】
Ｎ７５３０Ｚ

【作者名】
蒼愛

【あらすじ】
ありがとう。

私に、一通の手紙を残してくれて。

大好きだよ、今でも。

Story?Prologue.

君は、一通の手紙を私に残して
天国に逝ってしまった――。

・‥＊ ｡‥‥。‥‥‥ ＊ ｡‥‥。‥‥‥ ＊ ｡‥‥。‥‥‥
‥‥＊ ｡‥‥。‥‥‥ ＊ ｡‥‥。‥‥‥ ＊ ｡‥‥。‥‥‥
＊。

中3の冬。

その時私、三橋　彩には大好きな人大切な人が居た。

三上　陽

1つ上のお兄さん的存在の”幼馴染み“。
周りから見ると私の事は［片思いをしている女］と思っているだろう。
だが、それは正解だ。
私は陽兄に片思い、一方的に恋をしている。
実を言うと、この恋は叶わないと自分でも思っている。
決めつけだが、陽兄は私の事を［恋愛対象外］だと思っていると思うから――

”幼馴染み“はもう1人いる。

三浦　圭太。
私と同い年の男の子。
私たち3人はたまたま近所で「三」と文字が名前についていることから仲良くなった。

時々、からかわれるときもある。
でもそんなときはいつも陽兄が助けてくれた。
その姿は、逞しくかっこよくキラキラしてて。
そういうところを見て惚れたのだ。

多分、私の立場に誰かが入ったらその人も陽兄に惚れるだろう。
陽兄は外見も内面もかっこいい。
顔のパーツも揃っていて、モテるだろう。
圭太もモテる。
そんな2人に囲まれて育った私は、よく一定の質問をされる。
「彩ってどっち派?!陽君?圭太?!」
「どっちと付き合ってるの?!」
など・・・。

正直言ってそういうの迷惑。
疲れる。
でも、時折嬉しく思うときもある。
「陽君と付き合ってるの?!」
「彩いいなぁ〜、あんなかっこいい人と付き合ってるなんて。」
とか。
陽兄との事を言われると、すごくうれしい。

それは、私がただ思っているだけ。
でもいいの。

陽兄と一緒にいるだけで幸せ。
そう思っていたの。
”あの日“までは――。

・・・＊。・・。・・・・・＊。・・・。・・・・＊。・・。・・・・
・・・＊。・・・。・・・・・＊。・・。・・・・・＊。・・・。・・・・

Story?Prologue.（後書き）

どうもっ！
蒼愛です（，？ω？、）
しろ　ー　との作品を読んでいただき有り難う御座いますっｍｍ＊
週ｏ１のペ　ー　スで更新するかもですが、宜しくお願いします！
（、・ω・，）

Ｆｒｏｍ．Ａｏ

Story?知ってるよ、そんな事。

・‥＊゜・。・‥。‥・‥‥・＊゜‥・。‥・・‥＊゜・・‥。‥・‥
‥・＊゜‥・。‥・・‥＊゜・‥。‥・‥‥・＊゜‥・。‥・・‥
＊゜・・‥。‥・‥

１２月２４日・・・。

「陽兄！彩！」
圭太が大声で私たちの名を呼ぶ。
「あのさ、俺ステージ立てることになった！」
あまりにもいきなりすぎて動揺してる私と陽兄。
そんな中、気持ちを入れ替えたのか。
第一声を出したのは
「すげぇじゃん！圭太！」

陽兄。君だよ。

圭太は昔からライヴのステージに立てることを夢にし毎日家でエレキの練習をしてた。
夢が叶って良かったね、圭太。
でも、これが壊れてゆく。

「で、それいつだ？」
陽兄がワクワクして圭太に問う。
「それが、明日なんだよなー。来れるか？」
明日・・・クリスマスだ。
急だなぁ・・・。

陽兄は行くのかな？

「馬路か！俺、絶対行くわ！」
約5秒程で答えた陽兄。
「馬路で？！サンキュー！彩は来るか？？」
陽兄、居るもんね。
「もちろんっ！圭太の初ライヴだよ？！あったりまえじゃん！」
私も行くことにした。

圭太には申し訳ないけど、私が行くのはライヴ目当てではない。
ただ単に、”陽兄と一緒にクリスマスを過ごしたい“だけ。
ある意味、圭太には感謝してます。
ライ・・・いや、クリスマス楽しみだな。

学校帰りに、陽兄の高校の校門前で陽兄を待った。
これは学校がある日の日課。
いつも、陽兄と帰る。
「彩！」
聞き覚えのある声に呼ばれた私。
相手は、もちろん
「陽兄！」
私は陽兄のもとへ走った。
「ごめん、待った？授業長引いちゃった。」
謝る陽兄。
「許す！」
あーあ、私って陽兄にかなわないなぁ。

「陽！」
聞き覚えのない声が聞こえた。
それも、女っぽい声。
遠くから誰かが走って来る。

私の予想は当たりだ。
まさに、女。
「一緒に帰ろぉっ！・・・って誰？このちびっ子。」
この人、陽兄の事好きなのかな？
って言うか、陽兄の事を気安く”陽“って呼ばないでよ。
気持ちが悪い。
「まさか、陽が好きでここにいるの？！」

当たった。
図星だ。
今、私の顔は真っ赤だろう。
ばれたらどうしよう。
嫌われるかも。
「あ、図星だぁ。でも、無理ね。こんなガキじゃ陽に釣り合わないわよ。」

何この人。
そんな事、私だって分かり切ってることだよ。
やめてよ。
やだ、私泣きそう。

「止めろよ、木島。」
誰かが・・・私をかばってくれてる？
誰だろう。
ああ、やっぱりどんな時も助けてくれるんだね。

陽兄は。
「彩の方がよっぽどお前より俺と釣り合ってると思うけど？」
やっぱりかっこいい。
ありがとう、陽兄。
そういう場面、見せつけちゃって。
私に好きになって欲しいの・・・？

つい期待しちゃう。

「なにそれっ！私の方が陽と釣り合うんだから！こんなガキに釣り合うわけじゃないじゃない？！」
もうやだ。
逃げたい。
「行こう。彩」
陽兄は私の手を握ってどっかへ私を連れて走って行った。
陽兄、私の心読んだ？
私、逃げたいって思ってたんだよ。
なんで、分かったの？
また、私期待しちゃうよ。

ここは、公園だろうか。
ブランコと滑り台などがある。
「ごめんな、彩」
陽兄がまた謝った。

「木島の奴うっとおしぃな」
あ、陽兄の愚痴初めて聞いた。
「良いよ、だって本当の事だもん。」

確かに、木島さんの言ってることは本当だ。
”釣り合わない“
”ガキ“
ちょっと、つらいなぁ。
胸が、チクチクするよ。
いざ、そう思うと苦しいよ。

陽兄。

・:＊゜・:。:・::＊゜・。:・:＊゜・:。:・:
:・＊゜:・。:・:＊゜・:。:・::・＊゜:・。:・:
＊゜・:。:・::

Ｓｔｏｒｙ?知ってるよ、そんな事。（後書き）

はい、まだまだ続くよ！（、・ω・、）

Ｆｒｏｍ．Ａｏ

Story?クリスマス。

・‥＊ ｡‥ ‥｡‥ ‥‥ ＊ ｡‥｡‥ ‥‥ ＊ ｡‥ ‥｡‥
‥ ＊ ｡‥｡‥ ‥‥ ‥＊ ｡‥｡‥ ‥‥ ‥＊ ｡‥｡‥ ‥‥
＊ ｡

１２月２５日。

ついに来た。
圭太のライヴの日。
ずっと…ずっと、楽しみにしていたけれど、今はそこまででもない。

昨日の出来事があったから…。

でも楽しまなきゃ。

一応、陽兄に可愛いと言われるように努力し、オシャレとかメイクとか張り切ってみた。
陽兄はどう思ってくれるかな？
引かれたら、それはそれでショックだけどね…。

約束は１６時。
今は１７時３０分。
遅刻したくないもんね。
場所は、よく三人で遊んだ雪雨川。

…よく、ここで水遊びしてたよね。
夏の時も、冬の時も。
それで、圭太が一週間も熱が下がらなくて…
と昔の事を回想してたら…

ふわっ……。

上から何か降ってきた。
白くて、冷たくて、ちょっとふわふわしてるような…。
「あっ！！雪だ！」
一人で大声を出してしまい、周りからの視線が痛い。
恥ずかしい、と思って少し橋の下に隠れた。
こんな姿陽兄に見られたらどう思うか…。

ジカンハドンドンスギテユク。

時間は１６時過ぎ。
おかしい。
陽兄は絶対に約束を守る人なのに…。
何かあったのだろうか。
ちょっと、嫌な予感がした。

ｉｎライヴハウス。
ザワザワザワ…
「おいおい、圭太。」
「何すか？」
「幼馴染みちゃんはまだ来ないのか？」
「はぁ…。」

何やってんだよ、あいつ等…。
おせ…〔ピルルルルル！〕

？！電話？
誰だよ、こんな時にさー。

…陽兄の…母ちゃん…から？
〔ピルルルルル！〕
なんで陽兄の母ちゃんから電話？

〔ピルルルルル！〕
なんか、嫌な予感が。

〔ピルルルルル！〕
黒い何かが近くにあるような気がして。

〔ピルルルルル！〕
出るのが怖い。

〔ピルルルルル！〕
恐れるな、俺。

〔ガチャッ〕
怖がるな、俺。

『はい…。』
『圭太君?!陽が――――――!!!』
慌てて?明らかに様子がおかしい。
『落ち着いてください、陽兄がなんだって?』
でも、陽兄の事を伝えてる事は確かだ。
『よっ…陽がっっ――――――!!!』
『え…?』
そんなの、
誰が信じると思うか。

ｉｎ雪雨川
陽兄…遅いよ。
もう、ライヴ終わるよ…?
本当に…嫌な予感があ…たる?
怖い、怖いよ陽兄。
不安で不安で仕方がないよ…。

その時。
誰かが後ろから私の肩を叩いた。
陽…兄?!

「陽兄?!」
しかし、振り向くと。
そこには陽兄の姿はなく、
圭太の姿が?―――。

唖然としてる私にコートを掛ける圭太。
「けっ？！圭太？！なんでここに？！」

「いいか、彩。落ち着いて聞けよ。」
何、なに、ナニ。
やだ、怖い。
圭太が今から私に向かって言う言葉が。

「陽兄が、死んだ。」

いつのまにかずっと降ってた雪が、
大粒の雨に変わっていた。

この川の名前のように。

・・・＊ ・・・。・・・・・・＊ ・・・。・・・・・・＊ ・・・。・・・・・・
・・・＊ ・・・。・・・・・・＊ ・・・。・・・・・・＊ ・・・。・・・・・・
＊ 。

Ｓｔｏｒｙ?:クリスマス。（後書き）

まだまだ続くに決まってんぢゃんかっっ！ｍｍ＊
そこの君！
…もしかして、気になっていますでしょうか?！
な～んて馬鹿な期待しちゃってすいませんねっｒｙ（（

Ｆｒｏｍ．Ａｏ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7530z/

手紙 -ラブレター-

2011年12月29日17時45分発行